

ジャック・ロジェ「十七世紀前半における医学と科学の精神（一）」

逸見龍生

巨大でかつ滑稽な人物、トマ・ディアフォアルスは十七世紀医学全体にその影をおとしている。その術学的で壮大な無知、その仰々しいばかりの知ったかぶりは、一時代の医学の愚かしさというものを世間の目に要約している。彼の法を逃れるものはない。ひとつない。貴族、商人、有名人、誰であれいつの日かあの世へと旅立つ。からからになるまで瀉血され、体液という体液をみな吐瀉させられた挙げ句、——教則通りに——死んでいく。亡者たちは父祖たちの下へ合流し、医学においてはフランス王国に新しきものはなしと告げるだろう。

モリエールは嘘をついたのだろうか。この問いに答える前に、なぜこの問いがわれわれの主題に関わるのかをはっきりさせておかねばならない。十七世紀前半のこの時代には生物学者はいない。つまり、時間の一部を生物学に割く医師たちしかない。この単純な事実の確認が重要な意味をもつ。このことをつねに意識しておかねば、必ずしもみな常軌を逸した愚か者たちばかりではなかった一群の人々を、わたしたちは適切に理解することも判断することもできないかもしれない。尊敬すべき伝統に従って大学で教育を受け、重要な社会集団の成員であり、そしてとりわけ、正統

な資格をもつて医療の実践に日々専念していた十七世紀の医師たちは、科学的冒険に立ち向かうにはさして多くの武器をもつてはいなかった。ルイ十三世とルイ太陽王の治世下のフランス王国になるほど多くのディアフォアルスがいたとしても、また十七世紀フランスの知的繁栄において医学と生物学が貧しげな風采をしているとしても、そしてデカルト、パスカル、デアルグ、フェルマーといった威光ある名に対するにはペケ^ケくらいしか見あたらないにしても、そしてまた、結局のところ、モリエールが嘘をついてはいなかったとしても、われわれはこのしごく明白な事実の根拠を探さねばならない。まずわれわれはこの根拠をひとりひとり人間の方ではなく、さまざまな制度やその精神や教育の方法、そしてこの時代の科学の性格そのもののうちに捜し求めるべきである。以下の調査はごく簡単なものには違いないが、おそらくは科学の驚くべき停滞の諸原因を見出させることはできるのである。モリエールによって描かれた暗くグロテスクなカリカチュアを修正することはできるであろう。こうしてまた、相当に無理をしなければ尊重し続けていくことは結局のところ不可能だったあるひとつの伝統の長期に渡る残存や、また少なくとも今日のわれ

われにとつてはあたりまえの眞実に対してかくも執拗に存続した抵抗とはいったい何であつたか、理解することができらう。人間たちは独力で考えることは稀である。おのれの偏見、その習慣、その利害、その仕事やその時代にかまけ、自分のために考えることを忘れてしまふからだ。

一 教育方法と社団の精神

十七世紀のフランスには二十ほどの医学学校があつた。その大部分は十五世紀と十六世紀に建立されている。つまり教育はきわめて広い領域を覆つていた。だがその価値はばらばらであつた。最も権威ある大学——パリとモンペリエである——の博士はみすばらしい医学学校への侮蔑を隠さなかつた。フランス医学の平均的水準を決定することはここではしない。だから「沈黙」の大学や金銭的手段でごく簡単に取得できるような免状については無視しよう。ルイ十三世治世下のフランスにあつて、眞摯な医学の研究がおこなわれた機関だけがわれわれにとつて重要である。そこでの学業期間は長く、学費もよそよりも高かつたにもかかわらず、優れた学生は躊躇せず故郷を去つてパリかモンペリエに行った。この教育の選択はどのような精神の下に与えられ、受け入れられたのだろうか。誰が、いかに教育をしていたのだろうか。これがまずわれわれが提起すべき問題である。

教授の数は少なかつた。パリでは世紀初めに二名、一六五〇年には教授は四名に増えたが、その給与を支払うには至らなかつた。

モンペリエでは状況はもう少し良く、一五世紀末にすでに四つの教授職があり、アンリ四世より一五八二年と一五九六年にさらに二名増員されている。一六七三年にさらに七人目の教授職が設けられ、一七一五年に八人目が続いた。だが教育プログラムは幅広のものであつた。同じ教授が多様で広い領域を扱わねばならなかつた。十七世紀初めのパリ大学医学部教授ジャン・ギシャールは解剖学、生理学、衛生学、養生法を教授している。同時期のモンペリエでは解剖学と植物学は同じ教授の担当であつた。アンリ四世により一五九六年にリシェ・ド・ベルヴァルのために設けられたものである。一五八二年に設けられた教授職は外科術と薬学のためである。こうした条件下にあつて、教授は自分の教育内容の専門家ではなかつた。そもそも専門家はいたであらうか。解剖学者、植物学者、あるいは眼科医などがいたようには思われない。教授は教職博士であり、自分自身も一般教育を受けてはいたものの、必ずしも個人的研究をおこなつていたわけではない。パリのように同僚により選出されるのである、モンペリエのように王に任命されるのである、あるいはカオールや他のほとんどの大学のようによつて採用されるのである、医学全体を知悉し、すべてを教育することが要求された。専門家になるためには、趣味としてあるいは気質として研究者でなければならなかつた。十七世紀のフランス人医学教授には多くの研究者はいなかつた。解剖学に情熱を燃やしたジャン・リオランのようなケースは例外である。もっとも解剖に際してジャン・リオランは殊に古代人が観

察し、記述したものを再確認しようと努めるのであった。

というのも、そしてこの点が重要なのだが、ガレノス、ヒポクラテス、アリストテレスがすべてを発見した後、なにが残っているというのか。いずれにせよ教授たちが新しい発見をしたいと考えたように思われぬ。最も流布していた方法は、古代の書物のラテン語翻訳を取って教授席からそれを声を上げて読み、時にやはりラテン語でそれに注釈をつけていくだけであった。しばしば、ごく稀に、近代人の書物が読書の対象となる榮譽に浴した。解剖学すらも含めすべての部門がこうして教授された。学生は膝の上に身を屈めてノートを取る。だが解剖学については、書物に記述された部分を色つきの図版で指し示す役割を果たす者もいた。よくて年に四回、解剖の授業があった。自分の席上から——教授はそこから決して降りてこないのだが——ふつうはガレノスのラテン語訳を読む。次に補佐役がそれをフランス語で繰り返し、読まれた部分の器官を指す。学生は講義室の椅子に腰掛けたままでそれを眺める。さらにいえば見せられたのは主要器官だけであった。死体を保存する方法がなかったために急いでやらなければならなかった。病理解剖などは問題外であった。検査される死体はみな死刑に処された者たちのものだったからである。また死体を手に入れるには苦勞がいった。医学部長が、というのも死体入手には医学部長の力が必要であったのだが、死体を獲られないことがあったからである。このようなときは解剖は中止になった。こうした教育のあり方の信じがたいまでの理論的偏重を理解できよ

う。さらに知的怠惰がそれに輪をかけた。先ず教師たちの怠惰である。

授業の外での学生たちの勉強の方法とはどのようなものであっただろう。モンペリエでは図書館がひとつあったが、蔵書数は多くはなかったようである。パリには図書館すらなかった。十六世紀に集められた書物は、鉄鎖で書見台につながれていたにもかかわらず消失していた。一七四六年に初めて図書館が設けられしたが、寄贈本と遺贈本しかなかった。書物の値段は高く、学生は窮乏している。授業で扱われた著作家や過去の大注釈者の文献を入手するのは学生には困難であった。学生は要約や縮約本で間に合わせるしかなかった。真に新しい「新刊」を学生に勧める者など誰がいようか、教師がそれを知らず、あるいはその内容を非難しているとしたら？彼らの知識を補足するには、学生たちには教師や学業の先に進んだ者たちによる有料の私的授業しかなかった。それはなるほど医学の現実へより緊密に触れることのできる授業であったが、科学的探求心を深めるためというより、試験対策が目的のものであった。

試験は当然ながら獲得した知識を確かめるものである。各大学なりの試験方法があったが、バカロレア、学士、博士号の三つの主要資格については同じように試験、口頭試験、論文がどの大学でも課された。論文という語を濫用すべきではない。なぜならば、候補者が提出する四折版で四頁の論文には個人的な作業は皆無であったからである。その論文の著者は、しばしば公然と、試問を

行う当の教授自身であった。この試問だけが重要であり、候補者は同僚や教師たちと議論を交わし、知識を証明しなければならなかったが、とりわけ重要だったのは三段論法の扱いに慣熟しているかであった。ここで扱われた問題は、ほとんどの場合いかなる獨創性も欠いていた。一般生理学、医学実践、養生法、衛生学などから質問が用意された。化学や天文学の知識が必要であるかどうかといった、医者にとって有用な知識とはなんであるかといった問題がしばしば問われた。パリでは知られている疾病における瀉血や嘔下の効果などが好んで試問され、候補者は両方法の併用が齟齬をきたす場合を除けば、つねにその有効性を結論すればすんだ。ときにはより些末な、挿入り雑誌の愛好者をよこばせるばかりの問いもあった。曙ノ女神ハ美ノ女神ノ友カ？医者ハ哲学者デアルカ？神ニ比スベキ者カ？医者ニ髭ハ必要カ？式服ハ必要カ？といった問いに四時間をかけて議論がおこなわれた。候補者ギイ・パタン⁴へ託された試問は男性へノ女性ノ變化ハ不可能デアルカ、であり、その結論は変化は事実不可能であるというものであった。世情を賑わす出来事に関わることもあった。ルーダンの悪魔憑きの事件の四年後、一六三八年の時点で、体内熱ハ体ノ中ニ入リタル悪魔ノゴトキ効果ヲケツシテモトラサヌカ、という問いが出されたが、これに肯定形で返答するには勇氣がいった。突拍子もなく風変わりな主題がままみられたにせよ、これらの論文が示しているのは、良識に満ち、自分たちの技をよく習得しようとしてゐる人間たちの姿である。だが彼らにと

つての技の習得とは、文献をよく読み込んでいることを意味した。これらの仕事に獨創性や研究への趣味や知的獨立性を探しても空しいだけである。

もつとも医師たちもまた自分たちの教育が十全であるとは考えていなかった。彼らは教授職の追加を要求し、しばしばそれをかなえられた。医師は学生たちにひろい治療の実践を要求し、臨床教育を發展させ、教授資格者や学士たちに慈善診察への立ち会いや病院での研修を課した。だがこうした進歩はなるほど現実的であり、医師たちの職業人としての資質を改善したものの、學問の發展そのものには結びつかなかった。たとえ医師たちが病理學的事実や治療方法に多くの努力を割かなかつたとは非難できなくとも、十七世紀の医師が医学を閉じた學問とみなし、日常的な治療実践に加えてリブレスクな理論にのみ閉じこもつていたとを非難することはたしかにできるのだ。純粹で利害を離れた學問探究への関心が彼らにはあまりにもたやすく抜け落ちた。ハーヴィイやペケの発見に対するギイ・パタンの態度はそのことを見事に例証している。血液循環についてパタンは「ほとんど考慮に入れず」、「良き医学には血液循環よりもさらに重要な別の道がある」と考へていた。ペケの乳糜説に対しては、「よく証明されればなるほど信ずることのできるような新説だし、(病人ノ治療)において簡便と有益をもたらすであろう」。そしてこう付け加える。「例外的場合、それを用いるのみ」。この「良き医学」が生理学や解剖學の発見を上回る重要さをもつていとすれば、医師が研究者に

なるなど期待してはならない。

この研究への無関心さの中にこそ、この時代の医学精神——前記の教育方法が映し出し、また維持してきた精神——の大きな欠陥がある。この主に中世以来の教育方法は十六世紀においてはその有効性をもっていたものの、いまや危険なものになった。ルネサンスの時代にはなるほど古代人はよく知悉され、学ばれていたものの、いまだ学者たちに教えるべきものをもっていた。十七世紀初頭においてはすべての秘密は明らかにされてしまっていた。知的滋養物や興奮剤であるかわりにそれは障碍となった。その危険が察知されていないだけにますます危険な障碍である。多くの医師たちにとって「良き医学」は「永遠ノ相ノ中ニ」あった。彼らは科学の末端にいた。もはやなにもあらたに探索する必要はなく、読み、注釈を加えるだけで十分だった。十七世紀のフランスの医師は研究者ではなかった。だがその知識量で周囲を睥睨して憚らないたくい教師だったのである。学生をもたない医師の場合には、患者たちに対してなぜ苦しむのか、なぜ死ぬのかを説明する。この饒舌な教義主義、この絶えざる心の安寧の賦与こそが十七世紀の医師の大きな役割であった。ルネサンスの学者たちの疲弊してはいるものの自己に満悦した継承者として、ルイ十三世治世下の医師たちは自分たちの祖先がギリシア人に対して抱いていたあの淫刺として、嫉妬やときに恨みすら混じっていた賛嘆の念を忘れ去っていた。彼らがより好んだのは、自分たちの学んだものを情熱的に愛し、休みなく注釈し、それを繰り返すことだっ

た。また祖先たちによって集められた知的資本を安穩の中に享受すること、ブルジョワ的な仕方でも自分たちに利益と威光をもたらすこの科学的な文化財を管理し、いかなる価値下落に対してもそれを保護することだった。もはやそれは科学の征服者、冒険者の姿ではなかった。父祖の遺した遺産で生きる一家のさかしい息子の姿だったのである。

仕事をする時間はいかにこの医師たちに与えられたのだろうか。自分たちの特権を守ることに汲々とし、宗教や政治活動に明け暮れ、訴訟や請願で高等法院や国王諮問委員会を煩わせていた彼らに。似非医師や民間医師、化学者、エレクシルを売ったり、アンチモンやキナを与える異端のすべてと闘うこと。自分たちのような医師でもないのに病人たちの治癒のようなだいそれたことを思いついたものの、神のご加護によってしばしば病人たちを死なせてきた異端者たちと闘うこと。軽蔑と憎悪の対象である他の学派から来た医師たちと闘うこと。だれであれわれらの大学の博士以外のものたちはペテン医師と呼ばれた。十七世紀を通じてパリ大学の医師たちはモンペリエ大学の医師たちと闘い続けた。テオフラスト・ルノドー⁵に続いてモンペリエ派の医師たちは首都で診療をおこなうといっているそうではないか。世代は交替しても、憎悪はやむことはない。高等法院はその権威でもって血液循環説などの学説を潰す。大学の特権を擁護するためにはどんな手段でも用いられた。ヴェッサリウスが夜に抜け出し、モンフォコン絞首刑場やイノサン墓地で生と死の謎に分け入ろうとして死体を

盗みにいった時代はもはや遠かった。十七世紀の大医師たちがな
りおおせた名譽ある裕福で尊敬に値するブルジョワにはふさわし
くない、泥棒行為だった。パリ医学の「きわめて健やかなる」大
学を代表するギイ・パタンが国王執務官の高官たちとともにサ
ン・サクルマンの刑場に入っていくようなことなどありえただろ
うか。これこそが重要な問題であり、何を措いても解決されなけ
ればならないのだった。十七世紀の医学的ドグマティズムは侏儒
のブルジョワのドグマティズムであった。社会的成功こそが知的
成功から獲る報酬であった。なるほどギイ・パタンは宗教や政治
において自由思想家であったし、枢機卿やイエズス会士たちを痛
罵してはばからなかった。だが彼はピカルデーのプチ・ブルジ
ョワであった人間をヨーロッパ全土で知られるパリの大ブルジョ
ワに仕立てた医学を信じないわけにはいかなかった。

学生たちが医学を信じないなどいかにしたらできただろう。医
学の勉強を彼らが始めるとき、彼らは自由学芸修士であり、これ
から受けようとする教育のために必要な準備として哲学を修めて
きたばかりである。この授業の第三課程は伝統的に「物理学」と
「自然哲学」に当てられた。彼らはアリストテレスに即して第一
原理や質料と形相、四元素、類における生成と消滅とを議論した。
全体的議論を経て、次に学生たちは無機物質、天、生体、人体そ
して魂へと進む。教授たちはこの進め方に相応の自由があったよ
うである。あるものは天体に、あるものは昆虫について長く議論
をした。この教育に進展が見られなかったといえれば正確ではない

だろう。近代科学の端緒やより具体的な知識への配慮もまたそこ
に見いだせる。しかし思考の枠組みそのものは不変である。事実
に即する前にまず抽象的原則の議論から出発し、アリストテレス
に依拠した。議論形式はつねに討論法に倣い、反駁と返答の応酬
の後で結論へと至る。聖トマス以来かわらぬスコラの形式である。
ギリシア哲学全体から借りた多くの意見を開陳することもあつた
が、最終的にはアリストテレスを参照して終わる。他の理論はす
べてみな一行に要約された。すべてが図式的で抽象的にとどまっ
ており、こうした教育から現実内容を欠いた概念についての議論
の巧拙以外何か引き出すことは難しいように思われる。

自由学芸教科の修士がそれまでに慣れた教育よりも具体的な医
学の教えを議論するにはどうしたらよいであろう。教育と資格取
得には高い金を支払わなければならなかった。いかに賢明で熱意
ある者であろうと、一世紀前の学生たちに比べると十七世紀の学
生たちの胸にはなんと中世的な伝統と大学の特権への高慢な優越
心が満ち満ちていただろう。プレ・オ・クレールの馬鹿騒ぎや、
夜ごとの殴り合いや、剣の抜き合いは終わった。モンペリエの学
生たちが喧嘩事や仲間への肩入れのための指導格となるような
「王様」や「司祭」たちは消え去った。それに代わって教授たち
の選出する六ヶ月交替の「代言人」が設けられた。若者たちは快
適で見栄えのよい生活を保証してくれるような知識に飢えてい
た。真の学問よりは免状に目を輝かせた。もはやヨーロッパを遍
歴して高名な教授たちの講義を大学で聴いて回る鼓舞された学生

たちはほとんどいなくなつた。学生たちはいまやパリかモンペリエにとどまることに満足した。これらの大学で取得した博士号はフランス全土で通用したし、顧客にとつてもすでに医師の能力を保証するものと映つたので、若い医師により輝かしいキャリアを約束するものであつた。それゆえこの選択は利害を離れた犠牲というわけではない。第一、フランスの大学は世紀初頭から前世紀までの知的放浪に終止符を打ちたいと望んでいた。王令によつて批准された一六〇三年三月二二日のパリ高等法院裁定はドエヤポント・ムソンに登録したフランス人学生にフランスで学業を終えるよう命令するものであつたが、それは今更あえていうまでもなかつた。

学業をしつかりと修め、学士か博士号をえて大学を卒業すると、多くの場合若い医師たちはなんらかのコレージュでさらに教育を受ける必要があつた。これは主要都市で開業するために必要な手続だつた。しばしばあらたな試験が課せられたし、新たな学費納入は義務である。これは博士号の安売りを避けるための配慮であり、都市の施政者側が似非医師の活動にきわめて寛大であつた時代、一都市の医学会での専門的水準を維持するためには必要な慎重さを旨とした政策である。だがそれは同時に、職業組合による個人のあらたな掌握でもあつた。コレージュは会員を監督し、必要な場合には懲罰や脱退を勧告した。ジャン・リオランがリヨン、ルーアン、トゥールーズ、ボルドー、エックスのコレージュを特に評価したのは、おそらくはこれらの都市の医師たちが、化学医

学や血液循環や他の異端学説に対する趣味をほとんど持たなかつたからである。各地で開業を希望する新人医師は、おとなしくいうことを聴かねばならなかつた。

十七世紀フランス医学は社会団体に受肉された教義となつた。行列の先頭で蠟燭を抱えて進む医学部長も、ラブレールの衣装を重々しくひきずる学生も、熱にうなされた病人の枕元でヒポクラテスの『箴言集』を朗唱する医師も、みな自分たちが大きな伝統に属し、祭式に仕えるものであることを意識していた。この確信こそが彼らに自分たちの義務に関する痛烈な意識を与え、その職務に聖的な性格を課している。パタンは医師に貧者から金銭を受け取つたり、病人にたとえ間接的にも贈り物を要求することを禁じた。フォントネルの『称賛演説』を読むと、力の果てるまで病人や不具者や貧窮者のために尽くした医師たちの美しい姿が描かれていく。だが彼らの仕事の高貴さはまた、凡庸な者たちだけではなく、自分たちの知識の威厳や自分たちが自ら代表している伝統の壮大さへのつよい意識としても現れている。ギイ・パタンは神を侮辱する言葉を耳にした信仰者のような激しい苦痛に満ちた情熱によつて新来者から自己の医学を擁護した。経験医や化学者は彼にとつて公衆の敵であり、さらには不敬の輩であり、真の学問を嘲笑する者たちであつた。伝統への敬意、受けた教育や古代の大いなる徳への愛から、古代の師への盲目的な愛情が生まれた。教育のかわらない権威主義、組合の締めつけの堅さがこうした精神のありかたを強化してやまなかつた。この感情はまた、よ

り散漫的な精神にとつては、獲得した特権を手放さないのでおきたい、学問に疑義は挟みたくない、秘密めいた治癒者の黄金の言葉にたやすく翻弄される顧客たちを手元にひきとめねばならない、等々の意欲をもともなつていた。胸中に何があるうと、篤信的であるうと世俗的であるうと、高邁であるうと利害の虜であるうと、結果はつねに同じである。揺るぎない権威主義、そして科学のほぼ絶対的な停滞である。

フランス医学に關しての以上の指摘は、おおむねヨーロッパの大多数の国々にも適用できるであろう。スペイン医学は一六一七年に公式にヒポクラテスの教義の教授と注釈に専念し、「つまらぬ不適切な問題」には関わりにならないことを決めた。英国では、ハーヴィの時代の医学組織はフランスのそれとほぼ同様であつたが、化学医学の影響は次第に強くなり始めていた。ドイツの大学はアリストテレスの注釈活動が旺盛である一方、ガレノスの医学ほど厳密な科学の開花には適していない化学医学の影響を英国同様強く感じつつあつた。オランダでは周知のような科学的センターとなるには世紀の終わりを待たねばならない。イタリアではルネサンスの知的熱意はいまだおとろえておらず、四半世紀にわたつてヨーロッパの生物学の中心となることになる。

さてこのイタリアにおいてすら、科学の進歩は遲滞きみで不確実なものであるだろう。それ以外にフランスの停滞を理解することはできない。もしそうでなければ、書簡が数多く交わされ、国境を書物がやすやすと越えているこの時期に、たとえ、自己の特

権の保持に汲々としていてすら、医科大学が知識の歩みに長く抵抗することはできなかったであろうから。したがつてさらに研究を進めて、科学の進歩のこの遲滞の理由を探さねばならない。まずこの遲滞をわれわれは十七世紀医学における知的継承の重圧の中に求めねばならない。

二 歴史的状況——伝統かパラケルススか

実際、まず初めに確認できるのは、十七世紀医学の大半はその歴史の犠牲者であつたことである。デカルトの同時代者が相変わらずヒポクラテスのうちに治癒の技術の秘密を探し続けていて、改善すべき点はないかという考えにはついぞ思い至らなかつたのも、この自然で自発的なものとなつた精神態度それ自体が千年も続く伝統的態度だつたからである。この伝統の起源からいくつかの歴史的な状況を説明することができる。

ギリシアの学問が西欧医学全体の源泉である。アラビア人が六世紀にそれを発見したとき、すでに数世紀来この学問は生産的な活力を失つていた。アレクサンドリア学派は退潮期にあつた。迫害を逃れてギリシアから避難してきたネストリウス派とプラトン主義者によつて、ホスロー治世下のペルシアで創立されたジュンディー・シャーブル学派にはまだ活気があつた。だがガレノス以来、独創的天才はもはや姿を消していた。アラビア人たちはおびたしい翻訳の仕事を組織し、医学のこの「保守的」性格を強めた。翻訳は十二世紀から十三世紀にかけておこなわれ、ギリシ

ア医学の著作の大部分、とくにヒポクラテス、ガレノス、ディオスコリデスなどの著作がギリシア語からアラビア語へと移された。多大な労力をかけて探索され、入念にまた原文を尊重しつつ翻訳されたこれらのテキストは、当然ながらはかりしれぬ価値をもった。九世紀から十二世紀にかけて、アラビアの大医学者たちがそれに注釈を付け、また自分たちの著述した医学大全でそれを利用した。アラビア医学の歴史についてここで触れるべき場所ではない。本論の主題からいえば、アラビア医学が薬草研究においてきわめて大きな貢献をしたことと、臨床的知識を高度に発達させたこと、それに対して生理学と解剖学の進歩に関しては見るべきものがないことだけを指摘しておく。古代人はこれらの学問の偉大なる師であった。アラビアの大医学者たちもまた古代の後見から決して逸れることはなかった。中世においての大医学百科全書であった名高い『医学典範』の著者アヴィケンナ「イブン・スイナー」も、アリストテレスの翻訳者であり注釈者であり、また医学では特にヒポクラテスとガレノスに忠実であった高名なアヴェロエスもそれに変わりはなかった。

この頃にはすでにアラビア語からラテン語へのテキストの翻訳という別の仕事も始まっていた。キリスト教ヨーロッパはその知的停滞からようやく抜けだし、輝かしいイスラム文明のもとで知識を身につけようと勤めていた。十世紀になると、後に教皇シルベストル二世となったオーリヤックのゲルベルトゥスがバルセロナまで写稿を求めて旅する。十一世紀後半には、コンスタンティ

ヌス・アフリカヌスがサレルノ大学にアラビア医学を導入し、アヴィケンナの『典範』とともにヒポクラテスの『箴言集』とガレノスの『治療論』を教科に取り入れる。十二世紀、クレモーナのゲラルドゥスがアリストテレス、ガレノス、ヒポクラテス、アビュルカシス、アヴィケンナの翻訳に着手する。十三世紀医学・外科学の大百科全書であるサリセトスのギヨームの『外科学』には、ヒポクラテス、ガレノス、アヴィケンナ、アル・ラジの文献が纏められる。アラビア人によって、キリスト教西洋はそれまで中断されていたギリシア科学の宝库を再発見したのである。この再発見を取り巻く状況は容易ではなかったが、敬意に満ちた賛嘆の念に取り巻かれ、分かち合うほかなかった。こうした歴史全体が医師たちの精神に深く刻み込まれていた。写稿の探索、翻訳、注釈はあまりにも長い間にわたり学者の最も重要な仕事であった。その結果、こうして保存されたテキストは揺るぎない権威になった。近代人がどの点をとってもこの権威に反対できないほどであった。むろん彼らは何事かにおいてそれに反対しようと夢にも考えなかったのだが。

ルネサンスはこうした精神の状態を何も変えることはなかった。その逆である。たしかにヴェサリウスのような自立した学者たちはガレノスの解剖学を修正しようと試みだし、アンブロワーズ・パレヤ、ベルナル・パリツシーのような独学の研究者たちもいた。しかし大多数の者にとつて、古代人の権威は侵害されなかった。宝のように発見された原文への回帰、碩学たちが力を尽

くして手を入れたより正確な翻訳、印刷術により入手が遙かに容易になった刊本などによって、十七世紀の医者にはギリシアの科学はよりますます純粹でますます賛嘆的とされた。医者にとつてギリシア語は解剖学と同様に重要な知識であつたし、おそらくは前者の方が評価としては上であつたろう。さらにアラビアやスコラの注釈者もその信用を失つてはいなかった。少なくとも十七世紀中葉まで、アヴィケンナ、アヴェロエス、アルベルトゥス・マグヌスらはたえず医学書に引用され続けた。ヴェサリウスがガレノスを攻撃すると、山のような解剖学者たちがスキヤンダルだと叫んだが、その中には高名なユスターシユも加わつていた。ヒポクラテス集典のうち『生成について』*De genitura*は一五四二年から一五八〇年までの間に少なくとも六回重版された。このほかにイタリア語訳が一版、仏訳は二版刊行されている。同じく同集典の『小児の自然性について』*De natura pueri*は一五〇二年から一五七九年までに刊本と翻訳をあわせて九版が出版された。アリストテレスの権威はかわらず巨大であり続けた。チェザルピノーの著作全体がその重みのある証拠である。ルネサンスはギリシア科学に関する尊敬の念をまったく変わらず抱き続けた。反抗の兆しはただ大思想家たちの試みにみえるだけで、後に続くものはなかった。十七世紀の医者たちが自分たちの科学に接したとき、すでにそこには十世紀以上の古代の師たちへの畏敬による屈服の姿勢が続いていた。この遺産を投げ捨てるのは容易ではなかった。

敢然と古代の権威に反抗しながら完全なたちで発展し、また長期に渡つて重要な影響を及ぼした唯一の知的運動は、一般に化学医学と呼ばれるものである。この運動を代表する最も高名な人物は有名なパラケルススであつた。実験と真理の唯一の源泉としてのキリスト教を旗印に、彼はギリシアとアラビアの伝統に反抗した。古代異教作家とイスラム教徒の注釈者たちに対し、近代人に優越性を与えるのはまさにキリスト教への帰依なのである。周知のように、一五二七年にバーゼル大学で医学および外科医教授に任命されると、パラケルススはラテン語を捨てドイツ語で講義をおこない、そして学生たちの目の前でガレノスとアヴィケンナの著作を公然と火の中に放り込んでしまった。パラケルスス当人はきわめて偉大な実験家であつたという事実や、また東方からの知識を彼が尊重したという事実は、さしあたりここでは重要ではない。ここでわれわれの興味を引くのは、パラケルススの学説が新プラトン主義、グノーシス主義、カバラ等に広く依拠していたことである。彼の中に、十七世紀という時代の合理主義的とはいがたい諸傾向が集まつている。金属、惑星、そして人体の諸部分との間の関係をパラケルススは認め、治療にそれを用いた。占星学者の言いぐさには嘲笑をもつて返したが、〈事物の表徴〉や交感 *sympathie* によつて作用する護符や薬の存在は信じていた。古代人の庇護から身をふりほどいたというものの、それは錬金術師と中世の隠秘主義者の弟子となるためだった。ガレノスから学問をえるのではなく、神の恩恵という独特の直観から学ぶのを望

んだ。

化学医学は特にプロテスタント諸国、ドイツ、フラッドのイギリス、ファン・ヘルモントのオランダで急速に拡がった。パリ大医学部の精力的な努力にもかかわらず、フランスでもその影響は無視するわけには到底いかないものとなった。一五六六年以来、アンチモンについてパリで論戦が始まり、ジョゼフ・デュシエーヌ（クエルケタヌス）とその同僚ルポミエが対立する。一六一五年にパリではその使用が異論の余地なく禁制されたが、モンペリエでは、一六二二年から一六五五年までモンペリエ大学医学部教授を務めたプロテスタントの医学者ラザール・リヴィエール——確固とした化学学者であった——によつてこれが取り入れられる。パリ大学がいかに抵抗したにせよ、国王付侍医はすべてモンペリエ大学出身者に占められていた。これら侍医はパリ大学の鼻先で問題なく診療する権利があつただけでなく、化学に対してきわめて甘く、化学医学は流行の医学となつた。マザラン付侍医であつた化学学者ヴァロのあだ名はガルガンチュアであつた。ある日、催吐用の酒をみずからあまりなみなみと服用してしまつたため、患者の一人であつた家令ガルニヤンを亡くしてしまつたからであつた。モンペリエ派医師テオフラスト・ルノドーもまた化学学者であつたか、あるいはその可能性が高いと思われる。彼は自分の医局でたびたび公開診察と講演をおこなつたが、つねにパラケルスス主義者が顔を出していた。この害悪は大学にも及んでいゝる。一六四三年、医師免状を志願するミッシェル・ドュポンは論

文試問試験で「護符ハ疾病ヲ治癒スルカ」という問を立て、それに肯定的な返答をしている。二〇年後にはランスで、同問がギリシア語で立てられ、やはり肯定がされる。後の場合で重大なのは、審査対象論文の著者はランスの学生ニコラ・リシュレではなく、審査を主宰している指導教授ピエール・ウディネであつたことである。ギイ・パタンの嵐のような嘲弄の連発も空しいばかりである。一六四九年、パタンが息子ロベールに「化学者たちの諸原理はバカげており、嘘八百を並べたてた、キマイラではないか」という、彼自身の吼えるような文体から借りた題名の医学論文を審査申請させたとしても、空しさは募るばかりである。一六五八年、あの唾棄すべきゲノーが国王の疾病をアンチモンでの治癒に成功してしまふ。一六六六年、高等法院までが敵の通過を許してしまふ。パリ大学学長ル・ヴィニヨンの反対にもかかわらず、高等法院が発布した勅令は催吐酒の医師による使用を許可するものであつた。ル・ヴィニヨンは学長職を降任し、確固としたアンチモン擁護者であつたモヴィラン——モリエールの友人であつた——に交替する。モヴィランの学長就任は大部分の評議員教授が異論なく承認した。

ここに対立の図式が現れ、しかもそれは誘惑的にみえる。一方でピエール・ウディネとその化学や血液循環、アンチモン、キナへの親近感がある。他方でギイ・パタンがおり、吼え狂うガレノス主義者。未来と過去。この対立は必ずしも誤りではないし、だいたいにおいて、化学医学への趣味は精神の自由や観察事象への

配慮をともなっていたのも事実である。だが護符のことを忘れてはならない。結論を急いではならない。パリの医師に対し、なるほど効果のある薬であろうと、しかし激しい、そして化学者たちがあてずっぽう気味に、また調合については相当にいい加減に使っていたアンチモンへの反対をおこなったことを非難できるだろうか。パラケルススのあの名高い武器軟膏を情熱的に採用しなかつたという理由から、彼らが盲目的な伝統の奴隷であつたといえるであろうか。医局での講演できわめて真剣に説明されたその調合とは次のようなものである。

絞首されてしばらく大気に曝された死体から抜いた頭蓋骨内側の油分を一オンス。頭蓋骨の取り出しは、月が魚座、牡牛座ないしリブラ座の天宮にあり、金星に最接近した三日月時におこなうこと。同量のムミと人血。まだ熱さを保つたままであること。二オンスの油脂、二グラムの亜麻油、テレバンティーン、一杯のアルメニ。これらを乳鉢ですべて混合し、首の長い瓶に入れしつかりと栓をする。太陽が天秤座にあるときに調合するべし。

この軟膏は直接傷口に塗用するのではなく、共感力によって隔たつた場所から作用する。上の一節を読んで、瀉血や嘔下との恐ろしいほどの近さをどうして感じないでいられるだろう。一六四〇年のパリの医師たちにとって、化学医学は単にアンチモンだけを意味するではなく、武器軟膏や護符や、ベゾールといったア

ラビア伝来品も意味していた。この化学的・ヘルメス主義的・神秘主義的な医学は、激しく良識と対峙した。なるほど新しいものではあつたし、革命的ではあつた。しかし、それは決定的に良識の人々の憤激を買い、ガレノスとヒポクラテスの側へ立ち戻らせるだけのすべての特徴をもっていた。

十七世紀の医師たちにあつたオルテルナティヴとは以上のものである。古代人かパラケルススか。今日のわれわれの観点からすれば、選択は容易である。選ばなければならないのであれば、伝統から真摯で有用なものを残し、化学医学からは空想めいた無意味なものを捨て、新しく合理的な部分をとればよいのだ。だがこのような選択は、決定的なかたちで、新たな科学を構築することに等しい。伝統と非合理的なものから抜け出した新科学を。十七世紀の医師たちにはこのような科学の建立にふさわしい備えがあつたであろうか。それを次に考えなければならぬ。そしてこのことこそ、最も重要である。

註

1 モリエール『病は気から』の登場人物。

2 ジャン・ペケ（一六二二—一六七四）はフランスの医学者、解剖学者。一六四九年、モンペリエ大学学生の頃、犬の心臓の解剖実験によってリンパ管の一種で腸間膜の間を走り胸管に合流する乳糜管の経路を明らかにし、人体のリンパ系の観察とハーヴィの血液循環モデルを結合させた。著書に『新実験解剖学。血液循環および乳糜の運動に関する解剖学的所見』（一六五一）がある。

3 ジャン・リオランはフランスの医師、解剖学者（一五八〇—一六五七）。ハーヴィの同時代人で、その血液循環説に終始つよい反対の立場を翻さず、往復書簡のかたちで論争した。一世紀後の有名な医学者ハラーによるリオラン評価は辛辣である。「古代人にあまりに結びつき、血液循環説や胸官説など近代人のよりすぐれた発見に反対した」。

4 ギイ・パタン（一六〇一—一六七二）は十七世紀フランスの医師、人文主義者、コレージュ・ド・フランス教授。ウーダンの地方ブルジョワの家庭に生まれ、パリ大学で医学を修める。ラブレールを愛し、人文主義者ガブリエル・ノーデと親交し、自宅に豊富な蔵書を有して古典古代を広く研究した。ガリカニストであり、反イエズス会、反封建諸侯の立場を貫き、フロンドの乱では果敢にこれを擁護した。思想的には反デカルト主義者であり、自由思想家とガッサンデイの信奉者であったといわれる。没後刊行された『書簡集』*Lettres choisies*の主題は、医学、哲学、政治など広範囲に渡り、十七世紀の知的風土を知るための第一級の資料として後のピエール・ベイルなどにより高く評価されている。

5 テオフラスト・ルノドー（一五八四—一六五三）はフランスの医学者。ルードンのプロテスタント家庭に生まれる。一六〇五年モンペリエ大学に入学（パリ大学入学にはカトリック教徒である証明が必要であった）、一六〇六年に同大学で博士号を取得。故郷ルードンに戻り、開業医として貧者治療の問題に関わる。一六一一年同地で後の枢機卿リシユリユーと出会い、これが縁で翌年パリに召還され、貧者治療の功績により国王付物理学者の称号を与える。一六三〇年頃パリに医局を設け、以後ここで貧者の無料治療に尽力する。貧者の診察は毎週木曜の午後におこなわれ、病人はまずここで一次検診を受けた後、やはり無料で治療を引き受ける

医師へ紹介された。この医局で定期開催された当代の学者たちによる講演会は有名であり、この時代の一種の科学アカデミーの役割を果たしたらしい。デーバス（『フランスのパラケルス主義者』Cambridge, 1991）によると、講演は一六三三年から一六四二年まで毎週月曜午後におこなわれた。宗教と国家問題の他は制限がなく、哲学や科学、医学などの諸問題について自由に討論がおこなわれた。講演内容は印刷されている。ジャン・パティスト・モーラン、トマソ・カンパネラ、エティエンヌ・ド・クラヴなども参会した。ルノドーはこの医局で積極的に化学薬品の使用を奨励したため、パリ大学医学部により起訴されるに至る。庇護者リシユリユーの死去（一六四二）の後は訴訟に敗れ、医局をはじめ財産特権などあらましを失う。

6 アンブロワーズ・パレ（一五一〇—一五九〇）はフランスの外科医。
7 アンドレア・チェザルビーノ（一五一九—一六〇三）はイタリアの医師、植物学者。パトヴァ大学に学び（？）レアルド・コロンの弟子として血液循環説の構築に関わる。またピサの植物庭園長として植物の形態論的分類体系を着想した。アリストテレスの哲学を原義に復せんと目的から執筆された大著『逍遙学派問題』*Questionum peripateticarum* (1571) には、アリストテレス哲学によって医学の哲学的・科学的基礎づけを試みた「普遍的医術の実践」（第五巻）があり、十七世紀医学界に広く流布した。